



「ござ織り」(第71回 東光展出品作品)

## はじめに

平成二十七年九月、倉敷市より「倉敷の老舗」顕彰の対象企業に推薦されたという通知がありました。

百年以上の老舗の仲間入りができる则有り難くお受け致しました。そのとき、係の方から古い資料がありますかと訊かれたので、昔のレットルと封筒を提出しました。

その後、古い資料を調べてみると、昭和五年に岡山県知事宛に出した「献上希望書」が見つかり、その記述の中に明治四十一年創業とありました。これを機に今までの事がらを思い出し、何かのかたちに出来たらと思うようになりました。

今日まで一〇年間、家業を続けてこられたのも、お世話になった多くの方々のおかげと、感謝の気持ちでいっぱいです。厚く御礼申し上げます。

### 三宅松三郎商店のあゆみ

三宅松三郎商店は、私の父である三宅松三郎が明治四十一年（一九〇八）に創業した蘭（イ草が原料の）製品の製造販売の商店です。花蕙は、綿糸などを経糸、色とりどりに染色した蘭草を横糸として、花柄や幾何学模様を織り出したもので、「花ござ」、「花むしろ」ともいわれています。

岡山で蘭草製品といえば、畳表と花蕙（花ござ）が有名ですが、この花ござは明治十五年（一八八二）頃には、イギリスやアメリカに向けて大量に輸出されていました。その盛況ぶりは、明治二十六年には、国の輸出十品目に入るほどのものでした。しかしながら明治三十五年、アメリカの重課税に耐えられず、製品は次第に粗悪化の一途をたどっていきましました。

父 松三郎は、貿易の復興と信用回復のため、ひたすら良品化の研究を続け、近代稀なる特殊花蕙の考案に成功した一人とされています。その製織技術は岡山県無形文化財に指定され、農林大臣賞、通産大臣賞など多くの賞を頂きました。

創業当時の様子がわかるような写真が残っていないのは残念ですが、私の記憶と  
出、当時の文献をたよりに、昔を振り返ってみたいと思います。

### 三宅松三郎

(一八八二—一九五二)



明治十五年十二月十日、岡山県倉敷市西阿知町に生まれる。幼少の頃から研究心  
に富み、特に意を花菱の製造に注ぎ、事業のかたわら研究を怠らず日夜精進。  
明治三十五年、輸出花菱業界は、米国の重課税法に堪えられず製品は次第に粗  
となり遂に輸出は途絶して絶望的の惨状を見るに至った。このとき同氏は業界の将  
来を憂い、貿易の復興と外貨獲得に挺身。幾度か推薦された公職も辞退し、我国貿  
易上の信用回復のため、ひたすら良品製作の研究を続け、日夜寤食を忘れて遂に近  
代種なる特殊花菱の考案に成功した。

この間の苦心は到底筆舌に盡し難いものがあった。同氏は常に誠実さをもって製  
品の販売に当たっては再三吟味の上見本以上の製品を納品することをモットーとし  
たためその信用は日と共に高まり、同氏を称揚する声は次第に大きくなった。

彼の功績を受賞記録から見ると、

大正十四年同十五年昭和四、五年に巨り御買上の栄を賜る

昭和十八年 美術及藝技術保存資格者として商工大臣より認定

昭和二十四年 農林大臣賞

昭和二十六年 通産大臣賞

昭和二十七年 農林大臣賞

昭和二十八年 運輸大臣賞

その他各博覧会、共進会において最高賞、金牌の受賞、千数回。

特に昭和二十二年十二月今陛下岡山地方御巡幸の際、業界の功労者として拜謁  
の栄を賜ったことは一般の認める所である。なお、前途を大いに渴望されていたが  
病魔に冒され昭和二十六年三月三十一日に永眠した。

同氏の製織技術は岡山県無形文化財に指定されている。



てばた機の子キリと蘭草なめし機

## 岡山県の蘭草の歴史

蘭草の「蘭」は、備前、備中地方では「ユ（ゆ）」と発音されます。宿根性で地下茎  
が発達し、長さ約一メートル五〇センチの茎が、一株一〇〇本くらいずつ束のように集  
まって生えます。茎の太さは直径二〜二・五ミリで表皮は濃緑色をしています。内部  
は白い海綿状組織で満たされていて、硬い膜状の表皮と内部の海綿状の組織が作る弾力  
が畳表や花ござの原料として昔から利用されています。

岡山県の蘭草は、江戸時代には産業として定着し、大坂、江戸へも流通していました。  
岡山県内の栽培地域は南部が中心でしたが、津山市、真庭市、高梁市でも盛んに作られ、  
昭和三十年代には最盛期を迎え、岡山県は蘭草生産日本一となり、「蘭草王国」と呼ば  
れました。

しかし、昭和四十年頃から、岡山県南にも高度経済成長の波がやってきて、大気汚染  
で蘭草の先枯れによる品質の低下がみられるようになりました。また蘭草生産農家の中

にも水島工業地帯の会社に勤める人が増え、生産量は激減しました。そこで県外に、次に海外(中国など)にと藺草を求めるようになりました。【軒を貸して母屋を取られる】(安かろう、悪かろう) 時の流れでしょうか。

しかし今でも、県南部の数軒の農家が、岡山の藺草を絶やすまいと良質の藺草生産に取り組んでいます。

真冬に植え、真夏に収穫する藺草の栽培は重労働でした。藺草の苗は、苗田で育てられ、十二月から一月の厳しい寒さの中、苗畑に植え付けられます。凍結と雑草から苗を守るため、畑にはモミガラを敷きつめます。冬の間は枯れたような状態になります。成長した苗は、苗床から掘り取られます。苗分けの作業は、苗を引き抜き、しごいて泥を落とし、手で細かく割っていきます。苗分けは夜なべをして行われました。

苗分けした苗は一つ一つ丁寧に苗床田に植えられ、どんどん大きくなります。四月ごろには苗は成長して青々となり、六月頃、成長しすぎて倒れないように「先刈り」をします。その間に施肥、除草、防虫をして、梅雨が明けます。

梅雨明けの太陽が照りつける七月後半、真夏の厳しい暑さの中、藺草を刈る「藺刈り」が行われます。汗と泥にまみれる重労働で、機械化される前は、朝四時頃から鎌を持って刈り始め、休憩を入れながら夜九時くらいまで刈り取ることもあったそうです。

刈り取った藺草は、すぐに染土を溶かした泥水に浸し「泥染」します。染土とは酸化鉄や硫化物の少ない粘土のことです。藺田の隅にくぼみを掘って入れ、その中に藺草を浸します。こうすることで自然の美しい色を長期間保ち、折れにくく、香りもよくなります。「泥染」の後、天日で乾かす「日干し」の作業を経て、完全に乾かしてから倉庫へ運びます。雨に濡れると品質が低下するので、夕立などに気をつけないといけません。

「藺刈り」には、県内をはじめ中国・四国地方の農村から多くの労働者が出稼ぎで集まり、藺草生産農家と寝食を共にしながら激務に従事しました。藺草農家は給金以外に、朝昼晩の食事やお酒を用意して激務の労働者をもてなしました。それほどの重労働だったのです。